

書評



山崎文徳 著
航空機産業の技術競争力と認証制度
グローバル市場におけるボーイングの盛衰

藤岡 惇

絞り、研究成果を集大成したものだ。

第二次大戦後、米国の航空機産業（民需部門）は世界最強の競争力を誇ってきたが、21世紀に入ると、昔日の勢いを失う。大型航空機の分野では、欧州市場を握るエアバス社に首位の座を奪われたし、短距離・小型機・格安機の分野では、カナダ・ブラジルのメーカーが地歩を固めた。中国の航空機メーカーの躍進も目覚ましい。他方、日本の場合には様相を異にし、米英向けに航空部品を納める下請け的地位を脱していない。宇宙産業に目を移せば、日本の劣位はいっそう際立ち、電機・自動車産業のケースとの違いが大きい。

それはなぜか。本書は、世界屈指の名門企業というべきボーイング社を対象をしぼり、問題にアプローチしている。

ボーイング社の資本循環を3段階①流通―受注獲得、②生産―機体製造、③認証消費―航空の達成）に分けて、分析を試みている。

まず流通段階を取り上げたのが本書の第1部。設計中の航空機が顧客ニーズに的確に心えていることを宣伝し、顧客の

支持を集め、受注を獲得する段階だ。

受注した航空機を製造する段階の解明が、第2部の課題となる。製品の革新と生産工程の革新という分野で技術競争力を確立してきた歴史を深掘りしている。

基本設計や主翼の設計・開発、諸パーツシステムの統合といった分野はボーイング社が独占し、他企業・他国を排除する。日本企業には、周辺部の下請け仕事を配し、中核部には進出させない。電機・自動車産業で日本企業の制覇を許した経験は繰り返さないというボーイングの経営戦略、その背後の米国の国家意志を活写しており、本書の白眉となる。

航空機に重大事故が起されれば、多数の犠牲者が生まれるがゆえ、「欠陥製品」をつくらぬことが鉄則となる。そのため売り込み時に公約した性能基準を、完成後の航空機が満たしているかを、公的に認証する制度が特別の重みをもつ。第3部では、この制度の米国流運用が、米企業には有利に、外国企業に不利に働いてきた事情を活写している。

米国航空機産業の清華とも言うべきボーイング社盛衰のプロセスを一級史料とあるため、「どっちもどっち」と誤解されてきたが、NUTS派は宇宙核競争に至る道、MAD派と核廃絶派との共闘にこそ、地球生命系の生き残りの道があると、関は力説していた。

いまトランプ政権の下、NUTS派が制覇し、宇宙から「敵の核戦力の総つぶしできるゴールデン・ドーム」構想が唱えられている。ボーイング社がMAD派を顧客とするのか、NUTS派を顧客とするのか。疑問は尽きない。

著者は、評者より30歳若く、軍産複合体の領域でも貴重な業績をあげてこられた。NUTS＝「勝利型核抑止」をめざす時代の軍産複合体の運動の特質を解明してほしいと思う。

（晃洋書房・定価「本体3600円＋税」）
（ふじおか あつし・立命館大学名誉教授）

現地調査にもとづき、詳細に解明されたことは、本書の功績だ。先に紹介した時系列―流通、生産、そして認証・消費という3段階のすべてで、ボーイング社は確かな実績をあげ、躍進につなげた経緯を論証している。

日本の台頭を抑え込んだことも、ボーイングの覇権を支える条件となった。

21世紀に入ると、米国の民需向け航空機産業も、競争力の衰えを隠せなくなる。その原因はどこにあるのか。「新自由主義」と「株式資本主義」への傾倒こそが主因だったというのが、本書の結論となっている。

以下、残された課題を二つあげたい。新自由主義と株式資本主義への傾倒が、ボーイング社の落日の原因となったという著者の説明は首肯するとして、果たしてそれだけで説明できるのか。いま一つ、「宇宙軍拡と核軍拡」を活力源とする軍産複合体の介入を許したことが、ボーイングの健全な精力を奪い取ったという側面がなかったのか。

「顧客ニーズ」とは何か。民需の場合には、安全・安価で快適な旅行への要求で

あろう。

他方、顧客が軍部の場合、要求性能や仕様は、軍事戦略によって左右される。

たとえば戦闘機の場合、リーダーでは捕捉できないステルス性能が求められるが、民間機にとっては、事故に直結する危険がある。矛盾した機能を、多数抱え込むと、価格は暴騰するだろう。核戦争下でもワークし、核戦争勝利に貢献する機能を兵器に求めた場合、兵器の価格は高騰し、軍産複合体に未曽有の利益をもたらす、等々。このような「核軍拡の不経済学」の症状が、ボーイング社の衰えとどのように関係していたのかも解明して欲しかった。

著者の勤める立命館大学には、日本平和学会創設者の関寛治がいた。核抑止を支持する陣営にも、二つの分派がある。MAD派（「核戦争には勝者はいない」を承認する共滅覚悟派）とNUTS派（核攻撃の標的を敵の核戦力と指令中枢の総つぶしにあてると核戦争に勝利できるとする）との分裂だ。MADやNUTSにはともに「がらくた」という意味が

書評